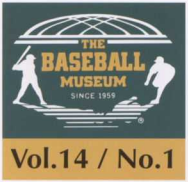
平成13年３月13日第三種郵便物許可　2004年４月25日発行　年４回（１、４、７、10月の25日発行）



Vol.14 / No.1

2004年開幕を迎えて

事務局長　小林二三男

1934年（昭和９年）、大リーグ選抜チームの来日がきっかけとなって大日本東京野球倶楽部（現在の読売ジャイアンツ）が結成され、プロ野球が産声を上げてから70年がたちました。

今や野球は国民的スポーツとして絶大な人気を博し、「見たいスポーツのアンケート」でも46%の支持を得て第１位となり、第２位のサッカー13%を大きく引き離しています。今年は３月に東京ドームで大リーグ公式戦の開幕試合が行われ、８月はアテネオリンピック、11月には日米野球などがあり、野球界は大いに盛り上がるに違いありません。

当博物館は、プロ野球だけでなく少年野球から高校野球、学生野球、社会人野球までアマチュア野球に関する展示や、海外に広がる野球に関しても展示公開して野球文化の伝承に努めています。また近年は、夏休みの自由研究や総合的学習のテーマとして野球を取り上げる小・中学生の方々にご協力をする機会が多くなり、教育的な施設としての期待も大きいと痛感するようになりました。

博物館というとどうしても硬い感じを与えたり近寄り難いものになりがちですが、このような中で本年は特に「親しみ易さ」ということを重視し、従来以上に「遊んで」「学べる」博物館として多くの方々にご来館いただけるよう館内各所の展示を考えて行こうと思っております。その第一歩として、このたびアマチュアコーナーを約２倍に広げ充実した展示をするようにいたしました。

新たに設置した広いガラスケースは、過去５回に亘るオリンピックにおける日本野球の軌跡と昨年札幌で行われたアジア野球選手権兼アテネオリンピック予選で優勝した長嶋ジャパンの監督、コーチ、選手が着用したサイン入りユニホーム25着を一同に展示しています。優勝トロフィー、メダルと全選手のサインボールも同時に展示しており、今後は８月のオリンピックに向けてさらに充実したコーナーとし、ご来館の皆様とともにジャパンの活躍を応援したいと思っております。また、従来の学生、社会人、軟式などアマチュア野球の展示に、

リトルリーグやボーイズリーグといった少年野球のコーナーを新たに追加したことで、野球少年にとっては、あこがれのプロ野球だけでなく、自分たちに身近な展示に巡り会えるようになりました。博物館で予期せぬ発見や出会いがあって、楽しさが倍増するのではないかと思います。

その他にも2004年の開幕を機に、展示を更新、充実させておりますのでご紹介します。

「プロ野球Today」コーナー

「プロ野球Today」コーナーでは、昨年活躍された選手や話題の選手の用具(新人王の和田、木佐貫両投手使用のグラブ、イ・スンヨプ、新庄剛志両選手のバットなどなど)を新たに球団からご提供いただき展示に追加しています。また、今年からは、各球団のキャッチフレーズ入り監督サイン色紙も展示しています。

川相昌弘選手 512犠打のバット、ボール展示

川相昌弘選手が昨年8月20日の横浜戦(東京ドーム)で、512犠打の新記録を達成した際に使用していたバット、バッティンググラブ、そしてボールを、"球史に残る名選手"コーナーに展示しました。川相選手、中日ドラゴンズ、読売ジャイアンツのご協力で、今シーズン末まで展示の予定です。

松井秀喜選手 MLB開幕戦のバット展示

2004年MLB開幕戦でも大活躍の、松井秀喜選手(ニューヨーク・ヤンキース)のバットとバッティンググラブを松井選手よりご寄贈いただきました。エントランスホールの日米野球特設コーナーに展示中です。

殿堂入りの人々を語る(5)

～野球観戦の思い出～

池田　哲雄（池田恒雄氏三男）

1989年殿堂入り
池田恒雄氏レリーフ

父に手を引かれて野球観戦に出かけた、真夏の後楽園球場の緑の芝生はナイターのカクテル光線を浴びてキラキラと輝いていた。私が父とともに初めて野球観戦に出かけたのは確か昭和40年のことだったと記憶している。ONをはじめとするスター選手の一投一打が眩い光を放っていた。

父子で野球観戦――といっても、私と父のそれはごく普通の父子とはいささか趣を異にするものだった。いつも試合開始直前に慌しく二人してバックネット裏の濃いグリーンの木製シートに腰を降ろす。やがて主審のプレイボールの声がかかると、いつの間にか私のすぐ隣にいた父は姿を消しているのだ。私は父がいなくなったことに驚く様子もなく、満員の観客席で一人熱い戦いを食い入るように見つめる。そして、試合の終わりが近づく頃、父は再び私の隣の席へと戻って来る。試合が終わると父は、「さあ帰ろうか」と言って再び私の手を取り球場から家路へと急ぐ。私たち父子の野球観戦はいつもこんな調子だった。

当時、我が家は神奈川県茅ヶ崎市にあったから、東京都文京区の後楽園球場からは東京駅を経由して約１時間半以上の時間を要する。いくら夏休みとはいえ夜更かしできない小学生の私にとって、帰り道はまさに試合後の遠征移動に等しかった。後楽園球場の椅子席でなく湘南電車の座席に腰を下ろしてからようやく父子の野球談義が始まる。その日の試合を観客席で見ていない父が何とゲームの内容を熱知していたことか。電車に揺られながら、ああでもないこうでもないという父子の会話が続くうちに夜が更けて行く。眠い目を擦りながら都会の雑踏と埃っぽい空気が湘南の爽やかな潮風に変わる頃、いつしか私は深い眠りに就いているのだった。

私の父は学生時代から雑誌「野球界」の編集にたずさわり、ジャーナリストとして黎明期からプロ野球の発展を見つめてきた。戦後の昭和21年には㈱ベースボール・マガジン社を創設。本格的な野球専門誌、「ベースボール・マガジン」を創刊するとともに、陸上競技、相撲、ゴルフなどの様々なスポーツ雑誌を世に送り出している。さらに野球が五輪の正式種目として決まると、ロシア、モンゴルといった国々にも野球の指導者を送り込んでいる。父の野球への思いは尽きなかったのだ。

私が父と野球観戦に出かけるようになった頃は、巨人がＶ９時代の全盛期。プロ野球人気も絶頂期を迎えようとしていたが、私の父もまた会社の経営者として元気ハツラツの最盛期だった。それだけに自ら先頭に立ち陣頭指揮を執らなければ気が済まない。野球観戦に出かけても、息子を一人観客席に残して後楽園球場から、当時はタクシーで５、６分の会社事務所へ戻り、ナイターのテレビ中継を横目で見ながら、会社の幹部を集めてはあれこれと厳しく仕事に関しての指示を与えていたのではないかと思う。あるいは何処か他の場所で会食の席に着いていたのかも知れない。休みの日でも自宅に会社の幹部とか知人を呼んでは話し込み、時には激しく叱責する姿も目にした。とにかく会社と仕事がすべての父親だった。そんな父の性格を知る私は観戦中に席を離れる父を咎めたり、その理由を問い詰めたりすることもなかった。

時は流れて平成元年。父の戦前からの野球界への貢献が認められ、特別表彰枠で野球殿堂入りさせていただくことになった。その年の夏、明治神宮球場でのオールスター・ゲームの試合前、野球体育博物館に飾られる功労者のレリーフの除幕式が行われた。父の姿もその中にあった。スタンドで拍手を贈る家族らとともに、私は何故か一人苦笑いを浮かべた。その理由は、最初から最後まで息子と野球観戦に付き合うような家族と家庭がすべての父親なら、間違いなく殿堂入りの栄誉に預かることもなかっただろうと思ったからである。

知ってほしいこんな資料（47）

2着の“ジャパン”ユニホーム

現在当博物館では企画展『プロ野球ユニホーム展』を開催中です。日本プロ野球の歴史を彩った様々なユニホームを展示し、その移り変わりを紹介しています。また、今年はプロ野球70年ということで、1934年の日米野球で、ベーブ・ルースら大リーグ選抜チームと戦った全日本と、70年後の今年、アテネ五輪へ出場する長嶋ジャパンのユニホームをあわせて展示しています。今回はこの２着のジャパンのユニホームを紹介します。

写真左は34年の全日本のユニホームで、89年殿堂入りの伊達正男氏の着用（背番号18）。左胸のマークはオール・ニッポンを意味するANで、左そでには日本とアメリカの国旗をデザインしたワッペンが、また展示ではご覧いただけませんが、えりの内側には“TAKASHIMAYA”のタグがつけられています。このユニホームを着たメンバーのうち14名が殿堂入りしています。

写真右は昨年11月のアジア野球選手権で優勝し、アテネ五輪出場を決定した長嶋ジャパンのユニホームで、松坂大輔投手が着用（背番号18）。ストライプのシャツの左胸に“JAPAN”と国旗が入るのは、金メダルを獲得したロス五輪時代からの伝統のスタイルで、長嶋監督の発案で今回初めて背中のえりの部分にも国旗がデザインされました。８月のアテネ五輪では生地を薄く変更するものの、このデザインのユニホームで戦うとのことです。

なお、この企画展以外でも館内には長嶋ジャパンのユニホームがホーム、ビジター含めて計28着展示中です。同じユニホームなのに、上着のボタンが全部開くものと上から３番目までしか開かないプルオーバー型のもの、丈が極端に短いものや、わきの下が開いているものなど、選手個々の好みが反映されている様子がご覧いただけます。また、ホーム用ユニホームの背番号の左には、それぞれのサインが入れられており、博物館での展示のために長嶋監督が率先して書き入れたとのことです。

企画展『プロ野球ユニホーム展』は５月23日㈰までの開催です。この２着の他、プロ野球のユニホーム30着を展示しています。ぜひお越しください。

学芸員　関口　貴広

杉下　茂 氏よりユニホーム２着が寄贈

左：杉下氏、右：小林事務局長
後：山口管理部長

３月12日、杉下 茂さん（85年殿堂入り）が来館、現役時代に着用したユニホーム2着を当館にご寄贈いただきました。２着とも1951年のもので、ひとつがサンフランシスコ・シールズのユニホーム（手前）。フランク・オドール監督の招待で、川上哲治、藤村富美男、小鶴 誠、杉下 茂の４選手がカリフォルニア州モデストで行なわれたシールズキャンプに参加、そのキャンプで着用したユニホームです。また、もう一着はその年の秋、日米野球（対大リーグ選抜）の全セントラル（セ・リーグ選抜）チームで着用したものです（奥）。これらユニホームは、企画展『プロ野球ユニホーム展』にて展示中です。

コラム／博覧・博楽 (10)

野球体育博物館ラプソディー

平田　美穂（白夜書房『野球小僧』編集部）

私共『野球小僧』は、1998年11月に初めて世に出ました野球雑誌です。創刊当時から関わっている私の役目の一つが資料探し。基本的には平日昼間に利用させていただいていますが、たまに休日にうかがうと面白い光景に出会うことがあります。

東京ドームに野球観戦に来たらしい家族連れが、図書室に入ってきました。開架式の棚に置いてある社会人野球の資料をめくって、その昔、お父さんが登板した都市対抗野球の試合結果を調べ始めたようです。

「わからんなあ…。載ってないんじゃないか？」

すぐにあきらめる、当のお父さん。しかし、お母さんはあきらめません。

「載ってないわけないじゃない！　○歳のときだから、昭和×年の大会ね」

後楽園球場のマウンドでカッコよく投げていた、若かりしお父さんの姿を思い出しているのでしょう。お母さんの目は燃えていました。子どもさんは飽きていましたが…。

別なある日のこと。息子さんの手を引いたお父さんが入ってきました。

「実は私、後楽園球場での最後の公式戦、巨人対広島の試合で、広島の小早川毅彦選手が打ったホームランボールをキャッチしたんです。だけど、打たれたピッチャーが誰だったのか、どうしても思い出せなくて…。手がかりになるような資料はありませんか？」

「後楽園球場の最後の試合というと、昭和62年10月18日ですね。翌日の新聞スクラップを見ればわかりますよ」

図書室の方が新聞スクラップを出してきました。

「ああ、打たれたのは西本聖投手でしたか！　そうそう、この日は巨人の吉村選手もホームランを打ってね…」

主審のミスで、カウント「2―4」から出た一発。吉村禎章選手の初の30号、後楽園球場最後のホームランの陰には、そんなエピソードがあったのでした。

「よろしければ、コピーをとりましょうか？」

「ぜひお願いします！　有料でも構いません。いやあ、本当に懐かしい」

感慨に耽るお父さんに、子どもさんが無邪気に話しかけます。

「お父さん、巨人に松井がいないよ」

「これは昔の新聞だから、松井も松坂もいないんだよ」

「じゃあ、江川ってテレビに出てる江川？　江川って野球やってたの？」

「そうだよ。掛布だって野球をやってたんだよ」

「そうなんだー！　あれ、お父さん、南海ってなに？　阪急ってなに？」

「ダイエーは昔、南海っていう名前だったんだよ。オリックスは阪急」

「えー、変な名前！」

このとき私は、自分がひどくトシをとったように感じました…。

仕事用の資料を集めつつ関係ない部分にまで目がいってしまい、「この選手が活躍していた頃の自分は…」と思いを馳せたりすることもしばしば。

野球体育博物館に足を運ぶのは、球場に足を運ぶのと同じぐらい楽しいことです。

こんにちは図書室です

～1934年の日米野球～

1934年にルース、ゲーリッグなどが来日した日米野球は、18試合が行われました。

当時の読売新聞を見ると、"超満員の大観衆酔ふ！"など盛況ぶりを表す言葉が目に付きます。

神宮球場の入場券が指定席（ネット裏）4円、内野券1円50銭、外野席50銭とあり、昭和12年頃の公務員の初任給が75円だったことから、高価な入場券であったと考えられます。それでも観客数の合計が45万人以上（『Spalding Official Base Ball Guide 1935年』より）になったことから、大変な人気だったことがうかがえます。その人気振りから日本にもプロ野球をという気運が高まり、この時の全日本チームを母体に大日本東京野球倶楽部（現在の読売ジャイアンツ）が誕生し、今年で70年を迎えます。

図書室ではこれらの資料のほかに、『野球界』など当時の雑誌も閲覧できますので、ぜひご利用下さい。

司書　山根　礼子

試合日	都市	球場	観客数	得点	登板した投手 上・全米　下・日本	本塁打
11月4日	東京	神宮	55,000	全米17－1東京倶楽部	ホワイトヒル 高橋、中村、菊谷	
11月5日	東京	神宮	55,000	全米5－1全日本	カスカレラ 伊達、浜崎	エビレル(2)、フォックス、ゲーリッグ
11月8日	函館	湯ノ川	5,000	全米5－2全日本	ゴーメッツ、フォックス 青柴	エビレル
11月9日	仙台	八木山	15,000	全米7－0全日本	ホワイトヒル、ブラウン 武田	ルース(2)、ゲーリッグ、フォックス、ミラー
11月10日	東京	神宮	55,000	全米10－0全日本	ゴーメッツ 沢村	ルース、ウォストラー、エビレル
11月11日	東京	神宮	55,000	ルース組13－2ミラー組	ブラウン カスカレラ	ルース(2)、フォックス、エビレル
11月13日	富山	神通	8,000	全米14－0全日本	ホワイトヒル 水原、沢村	ルース、ホワイトヒル、フォックス
11月17日	東京	神宮	32,000	全米15－6全日本	ブラウン、カスカレラ 浜崎	ゲーリッグ、フォックス、ルース(2)、
11月18日	横浜	横浜公園	15,000	全米21－4全日本	ゴーメッツ 青柴、浜崎	ルース(2)、ゲーリッグ、フォックス、エビレル、井野川
11月20日	静岡	草薙	8,000	全米1－0全日本	ホワイトヒル 沢村	ゲーリッグ
11月22日	名古屋	鳴海	12,000	全米6－5全日本	カスカレラ 伊達	
11月23日	名古屋	鳴海	20,000	全米6－2全日本	ゴーメッツ 武田、浜崎	
11月24日	西宮	甲子園	40,000	全米15－3全日本	ホワイトヒル 伊達、浜崎、青柴	
11月25日	西宮	甲子園	50,000	ミラー軍5－1ルース組	（ミラー軍）ブラウン （ルース軍）青柴 ゴーメッツ（9回のみ両軍で登板）	新富
11月26日	小倉	到津	6,000	全米8－1全日本	カスカレラ 浜崎	エビレル、ルース
11月28日	京都	京都市設	7,000	全米14－1全日本	ゴーメッツ 沢村、青柴	ミラー
11月29日	大宮	大宮	6,000	全米23－5全日本	ホワイトヒル 武田、浜崎、スタルヒン	ゲリンジャー(3)、ルース(2)、ホワイトヒル(2)、ゲーリッグ、フォックス、ヘーズ、堀尾
12月1日	宇都宮	宇都宮県営	7,000	全米14－5全日本	ブラウン 沢村、青柴	ミラー(2)、ゲリンジャー、エビレル、

博物館からのお知らせ

理事長・評議員の変更

【新　任】
理事長兼評議員
　根来　泰周氏（プロ野球コミッショナー）
評　議　員
　枝川　憲寿氏（財全日本軟式野球連盟副会長兼専務理事）
　佐藤　賢二氏（㈱福岡ダイエーホークス取締役球団代表）
　山中　正竹氏（㈱横浜ベイスターズ専務取締役連盟担当）
　星野　好男氏（㈱西武ライオンズ取締役球団代表）
　井野　修氏（セントラル野球連盟審判部長）

【退　任】
理事長兼評議員　川島　廣守氏
評　議　員　長谷川暢男氏、瀬戸山隆三氏、
　　湊谷　武雄氏、小野　賢二氏、小林　毅二氏

維持会員を募集しています

財団法人 野球体育博物館は、昭和34年に野球専門の博物館として開館して以来、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約3万点、図書・雑誌は約5万点を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。
また、年1回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。
維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

会員の特典
・当博物館発行「ニュースレター」（季刊）送付します。
・何度でも無料で博物館に入館できる優待証を発行します。
・会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
・イベント情報などを優先的にご案内します。

会員の種類と会費
年会費（4月～翌年3月迄）
　法人　　1口　10万円
　個人　　1口　1万円
※ 入会月により、初年度年会費の割引があります。
お問合せ　財団法人 野球体育博物館　業務部まで

ピンバッチを発売しました！

写真のような博物館のロゴのピンバッチを発売しました。価格は1個500円（消費税込み）です。
ピンバッチは博物館受付、館内自動販売機で販売しています。ご来館の記念にぜひお求め下さい。

ピンバッチの仕様
・素　材　　銅
・サイズ　　31.5mm×24mm
・厚　さ　　1.4mm
・着　色　　擬似七宝1C（白）＋プリント2C
・メッキ　　金

●編集後記
野球シーズンが始まり、展示にも新しい資料が仲間入りしました。長嶋ジャパンのユニホーム、川相昌弘選手の512犠打達成時のバット、MLB開幕試合でのジュリアーニ前ニューヨーク市長始球式のボールや松井秀喜選手のバットなどです。新しい展示品とともに皆様をお待ちしています。

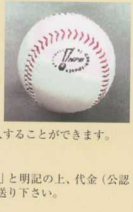
プロ野球公式記録集「オフィシャル・ベースボール・ガイド2004」の販売

㈳日本野球機構編（税込 2,900円）

1963年から毎年発行されているプロ野球公式記録集です。両リーグの全選手打撃成績・全投手成績、日本シリーズ・オールスターゲームの記録集、イースタン・ウエスタンリーグの成績、セ・パ両リーグの記録集、個人年度別成績などプロ野球の1年の出来事がわかる一冊です。
「オフィシャル・ベースボール・ガイド2004」は野球体育博物館で購入することができますので、お問い合わせ下さい。

プロ野球公認球

大好評のプロ野球公認球を今年も販売しています。
「反発テスト」に合格したボールには「試合に使ってよろしい」との合格印「APPROVED BY COMMISSIONER NPB」が押されます。このコミッショナー印の押された試合球は、一般には販売していない「貴重」なボールです。そのボールを博物館で購入することができます。



公認球　　1個1,600円（税込）

郵送ご希望の方は、「公認球希望」と明記の上、代金（公認球代+梱包送料）を現金書留でお送り下さい。
梱包送料　　1個　　250円
　　2～3個　　400円
※ご購入は、1人3個までとさせていただきます。

● 博物館のご案内

場　所　東京ドーム21ゲート右
開館時間　3月1日～9月30日AM10時～PM6時
　　10月1日～2月末日AM10時～PM5時
　　＊入館は閉館の30分前まで
入館料　大　　人　400円（300円）
　　小・中学生　200円（150円）
　　（　）は20名以上の団体
休館日　月曜日
　　（祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館）
　　年末年始（12月29日～1月1日）
〈5月・6月・7月の休館日〉
5月　10日・17日・24日・31日
6月　14日・21日・28日
7月　5日・12日
＊4月27日～5月9日まで無休です。

Newsletter Vol.14 / No.1
2004年4月25日発行
編集・発行　財団法人 野球体育博物館
〒112－0004
東京都文京区後楽1－3－61
Tel 03（3811）3600　Fax 03（3811）5369
http://www.baseball-museum.or.jp/
定　価　100円

The Baseball Museum

平成13年3月13日第三種郵便物許可　2004年4月25日発行　年4回（1、4、7、10月の25日発行）
Newsletter

THE BASEBALL MUSEUM SINCE 1959
Vol.14 / No.1

リレー随筆(16)

競技者表彰委員幹事　館林　誠（中日スポーツ）

巨人の前身である大日本東京野球倶楽部が産声を上げたのが、1934年の12月26日。我が国のプロ野球も、今年でいよいよ70歳となる。70歳といえば、人間でも体のあちこちにガタがくる年齢。日本プロ野球も、そんな年齢を迎えたと言えるだろう。

近鉄が球団名の売却を発表したのが、1月31日。結局、渡邊恒雄・巨人オーナーをはじめとした球界内の猛反発にあい白紙撤回を余儀なくされたが、近鉄といえば、現在のパ・リーグ最古参球団。協約違反うんぬん以上に、そこまで近鉄が追いつめられているという現状を直視する必要がある。

フリーエージェント（FA）制の導入以来、高騰の一途を続ける選手年俸。そして長引く景気の低迷。さらに看板選手のメジャー進出は、もはや歯止めの利かない状況となっている。これは何も、パ・リーグに限った問題ではない。

様々な不安が顔をのぞかせる70歳。時代とともに、球界を取り巻く環境も変わっている。変化に対応し、球界全体の発展を考えたルール、協約の見直しも必要だろう。

たとえば今年就任した根來泰周コミッショナーが、「個人的意見」と前置きした上で「面白いと思う」と発言したセ・パの交流戦開催。巨人戦というドル箱カードを持たぬパ・リーグが熱望し、既得権を侵害されたくないセ・リーグが強硬に退けてきたものだが、見えるのは互いの利益ばかりで、ファンの声というものは、おざなりにされてきた。

ファンあってのプロ野球。これが、単なるかけ声だけであってはいけない。古い時代のルール、協約の見直しは、70歳を迎えた日本プロ野球への“医学的治療”。そして、もう一つ健全なプロ野球を保つために、忘れてはならないのが、日本プロ野球界全体、各球団における“自己管理”だ。

イチローが日本人野手としては初めて大リーグに挑戦したのが2001年。イチローのバットマンとしての活躍以上に記憶に残ったのが、なかなかサインをしようとしないイチローを、ある選手が試合前の練習中、抱きかかえてファンとのミックスゾーンに運んでいったという記事だった。

大リーグに学べ、ならえで歩んできた日本プロ野球。技術以上に遅れているのは、ファンに対する接し方、訴え方ではないだろうか。「プロ野球選手に対する畏敬の念が、年々失われているように思うんですよ」。以前、新聞の企画で、大のプロ野球ファンとして知られる漫画家・やくみつるさんを取材したとき、こんなことを言われた。

私たちが子どもの頃のスター選手は、ある意味ヒーローだった。今の野球界にもスターはいる、アイドルもいる。だが、昔見たヒーローとは何かが違っている。情報を伝える我々マスコミも、見る側のファンにも問題がないとは言えない。しかし、ファンに愛されるプロ野球作りには、球団の企業努力、選手の自覚も求められる。

区切りの年を迎え、大きな曲がり角に差し掛かった日本プロ野球。もっともっと、“病”には気を配り、治療すべきところはしっかり、治療してほしい。100年、200年と、健康で長生きするためにも。